

まえ はら たけ こ
前 原 武 子

学位の種類 教育学博士
学位記番号 教 第 37 号
学位授与年月日 昭和62年9月30日
学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 児童の自己有効性動機に関する研究

論文審査委員 (主査)

教授 細 谷 純 教授 寺 田 晃
助教授 宇 野 忍

論 文 内 容 の 要 旨

1. 本論文は、従来の児童心理学および教育心理学研究における人間行動の「動機 (MOTIVE)」および「動機づけ (MOTIVATION)」に関する理論を総点検した上で、特に内発的動機および動機づけの重要性に着目し、かつその中心を「自己有効性動機および動機づけ」として把握することの生産性を明らかにしようとするものである。

具体的には、理論的考察に基づき、自己有効性動機尺度を試作し、その信頼性、妥当性を追求することを通して、児童の自己有効性動機水準の個人差を明らかにしようとし、更に、この自己有効性動機の発達に影響する要因の分析を行うものである。

2. 論文の構成は次のとおりである。

第1章 問題提起

第2章 有効性動機づけ理論の位置

第3章 達成動機と親和動機の関係に関する研究の概括と再検討

第4章 有効性動機に関する研究の概括

第5章 有効性動機尺度の構成に関する研究

第6章 有効性動機水準と自己概念

第7章	有効性動機の個人差と原因帰属
第8章	有効性動機の個人差と仮想的葛藤事態における対応様式
第9章	文章記憶における有効性動機の個人差とタイトルの効果
第10章	有効性動機水準におよぼす親の養育態度
第11章	教師の指導性と有効性動機
第12章	課題志向性水準と目標設定行動
第13章	総括

3. 本論文の内容は次のとおりである。

第1章では、本研究を進めるに当たって、「自己有効性動機」が児童の適応能力の中核をなすという前提から出発すべきであることを提案した上で、1) 自己有効性動機理論の明確化、2) 自己有効性動機の個人差を査定する尺度の考察、3) 自己有効性動機水準の高い児童の示す効果的行動の確認、4) 自己有効性動機の個人差に影響をおよぼす諸要因の確認、が研究課題として提起される。

第2章から第4章までの三つの章では、従来の「動機および動機づけ」に関する研究が概括され、再検討される。その結果として、White, R, W. にまでさかのぼりうる「自己有効性動機づけ理論」が、従来の諸理論を総合する包括的理論たりうることを主張する。即ち、従来の諸研究において内発的動機の中核と見做されていた「達成動機」だけでなく、対人関係の確立や維持のための「親和動機」もまた、自己の有効性感情を経験できる仕方で効果的に行動しようとする際の内発的動機に由来するものとして、共に「自己有効性動機」を基底とするものであることが論じられる。

第5章では、「自己有効性動機尺度」の構成を試みる。学業関連課題達成状況、対人関係状況のそれぞれにおいて、自己有効性感情が得られる仕方で効果的に対応する傾向を測定する質問紙を構成し、1982年から1984年までの間に、約2,000名の児童、生徒を対象にして、尺度の検討を行い、数次の改訂の後に、課題志向性および対人志向性の二種の尺度を構成する。これら両尺度の信頼性は、再検査法等により吟味され、十分に満足すべき結果を得ている。他方、妥当性は、1) 「自己価値」との関連性の度合い、および2) 教師による評定と児童自身による評定との一致の度合い、の二点から検討され、前者では両志向性と共に、また後者では課題志向性が、満足すべき結果を示した。そこで更に、3) 学業成績との関連、および4) ソシオメトリック地位との関連を見たところ、前者は、課題志向性のみと、また後者は、低いながら対人志向性のみと正相関がみられた。

そこで第6章から第9章までは、両志向性の予測性を検討するために1) 認識の対象としての自己概念、2) 原因帰属、3) 仮想的葛藤事態における対応様式、4) 文章記憶能力

の四変数がそれぞれ取りあげられ、自己有効性動機との関連が検討された。

まず、認識の対象としての自己概念と、動機づけとしての自己概念である有効性動機との関係について、小学五年生188名を対象に、現実および将来の自己認知、さらに友人認知が、達成的特性と親和的特性を記述する形容詞を用いて検討された。その結果、主として次の2点が明らかにされた。まず、課題志向性の高い者は、自己の達成的特性だけでなく、親和的特性をも高く自己評価するし、友人からも高く評価されていると認知する傾向を示すが、対人志向性の高い者は、自己の親和的特性のみを高く自己評価した。この結果から、課題志向性が達成的特性の評価を、また対人志向性が親和的特性の評価を、それぞれ弁別的に予測するという尺度の弁別性の問題として、また、課題志向性に対する社会的価値評価の波及効果の問題として理解することの可能性が指摘された。第2は、有効性動機の高い者が、現実自己と将来の自己についての認知間にズレが小さく、また自己認知と友人認知との間のズレも小さいとの結果であった。これは、有効性動機の高い者における自我の安定や適応の良さを示すものであると結論づけられた。

次に、有効性動機水準の高い者が、自己の有効性感情の経験に関わる原因帰属を示すことが予想され、小学五年生139名を対象に検討された。樋口らによって考案された学業課題達成領域における原因帰属、および友人関係領域における原因帰属をそれぞれ測定する尺度を実施し、課題志向性および対人志向性との関係を調べた。その結果、次の4点が明らかにされた。A) 課題志向性の高い男子は、学業領域における成功を「努力」に帰属させ、友人関係領域での成功を「自分の印象の良さ」に帰属させる。B) 対人志向性の高い男子は、両領域における成功および失敗を「運」に帰属させる。C) 対人志向性の高い女子は、友人関係領域における成功を「自分の性格や印象の良さ」に帰属させる。D) 課題志向性、対人志向性いずれも、その水準の高い者は、両領域における失敗を「努力不足」に帰属させる。これらの結果は、予想どおり、原因帰属領域の違いによって帰属される原因が異なること、しかし、有効性動機の高い者は、自己有効性感情につながる原因帰属を行うことを示すものである。また、性差については、課題志向性は男子に対して、対人志向性は女子に対して、より強く期待される行動傾向の反映であると説明された。

さらに、自己有効性感情は、より困難な課題状況の効果的処理によって経験されるであろう。この仮説を検討するために、異なる志向性と、課題達成葛藤事態および対人関係葛藤事態のそれぞれにおける成功的処理予想反応との関係を検討した。その主な結果は、小学五年生男子132名において、課題志向性水準の効果が課題達成葛藤事態の成功的処理予想反応の個人差に反映されたのに対し、小学五年生女子96名においては、対人志向性が対人関係葛藤事態における成功的処理の予想を予測するものであった。この結果は、有効性

動機概念の妥当性を示すものであり、また、社会的価値期待の反映であると説明された。

第4に行われた実験は、自己有効性動機が情報処理の準拠枠として機能することを確かめるものであった。同一の文章に達成的タイトルと親和的タイトルを用意し、その手がかりの効果と、異なる有効性動機の効果を検討する実験計画が実施された。その結果、小学六年生171名において、対人志向性水準の高い者が対人関係の内容の再生に優れることが見出された。この結果は、人が、自分の動機づけ方向と一致する情報の処理において優れた能力を発揮するという、本研究の予想を支持するものであった。しかし、課題志向性水準の効果はみられず、また、タイトルの有効性動機との有意な交互作用もみられなかったことから、それは今後の課題に残された。

以上の研究結果は、概ね、課題志向性が課題達成状況の処理に、対人志向性が対人関係状況の処理に、それぞれ効果性を発揮するという、有効性動機水準の個人差を明らかにするものであり、同時に、構成された有効性動機測定尺度の予測妥当性を確認するものである。

では、児童の自己有効性動機の発達を規定する要因は何か。第10章から第12章までは、この情報を得るために行われた。

第10章では、親の一般的養育態度が、辻岡、山本による「親子関係診断尺度 EICA」によって、また、親の自律的奨励態度が、改訂された「自律性奨励尺度」によって、それぞれ測定され、自己有効性動機尺度の結果との関連が調べられた（前者では、中学一年生158名、後者では、小学五年生109名）。

結果は、母親の受容的態度が、子どもの課題志向性および対人志向性の発達に貢献する要因であることを明らかにするものであった。しかし父親の場合には、受容的態度が子どもの対人志向性の発達に貢献しても、課題志向性の発達にとっては無関係であること、むしろ、父親の統制的態度が子どもの課題志向性の発達に貢献する要因であることを見出した。この統制的態度は、自律を奨励する家族の雰囲気の中で、母親の受容的態度と相補的に機能しながら、子どもの課題志向性の発達に影響するものであるとの示唆がなされた。

第11章では、教師の指導性が、間接的に児童、生徒による教師観ないしは指導観の評定（de Charmsらによる「学級の指し手雰囲気尺度」の翻訳、改訂版）によって測定され、あわせて、学級雰囲気、学級モラル、学習意欲、および自己有効性動機が、それぞれの尺度によって測定され、相互関連の様相が検討された。この結果、自律を奨励する雰囲気が強い学級においては、生徒が自分の学級を肯定的に認知し、学級担任に親愛の感情を持ち、高い学習意欲および自己有効性動機を示すことが明らかにされた。

さらに、第12章では、課題志向性低水準の児童に対する動機づけ方法を探索するために、

児童が自分の能力に見合う目標選択をする時に高い得点を与える手続きを意味する個人難易度情報条件と、選択課題が困難なほど高い得点を与える課題難易度情報条件の効果について比較検討を行っている。その結果、課題難易度情報条件の方が、課題志向性水準にかかわらず、より困難な漢字学習課題を選択し、学習成果を上げることが明らかにされた。この結果は、従来の達成動機づけ理論に反する新しい発見であるが、しかし、それは、本研究における得点化の方法や学習課題の特殊性によるものかどうかの問題と共に、今後の再検討が必要であると指摘された。

最後に第13章では、これまでの結果を総括しながら本研究の意義と問題点とが明らかにされている。

論文審査結果の要旨

本論文は、White, R. W. によって提案された「自己有効性動機」概念および「自己有効性動機理論」を基盤にすえながら、教育場面をも見据えつつ、人間行動の一規定因たる「動機」および「動機づけ」に関する包括的理論を構築しようとするものであった。

その結果として、1) 有効性動機水準の測定方法や研究変数が明瞭でなかった現状の中で、測定尺度を構成し、その予測妥当性を検討する過程で、有効性動機研究の手がかりとなる変数を示した。これは、今後の有効性動機の研究を刺激する効果をもつであろう。2) 異なる側面の有効性動機と異なる状況における行動傾向との相互作用を検討する構造的な研究計画の可能性を示した。これは、人格心理学における新しいアプローチの発展に貢献するものといえる。3) 有効性動機の個人変数と状況変数の交互作用に関する研究によって、有効性動機の高い者が、自己の有効性感情が得られる状況において、その感情につながる行動様式を取る傾向のあることを見出した。これは、次の2つの意義をもつ。まず、その結果は、自己の存在観に満足しながら、生き生きと生活する有効性動機の高い子どもを育てるために、児童心理学や教育心理学がどのように努力を払えばいいかという問題提起を可能にし、その方向の研究を刺激するであろう。次に、それは、固定的能力観に対する警告の意味をもち、今後、個人の多面性を理解するための研究を刺激するであろう。4) 有効性動機の発達に影響する要因についての研究結果は、子どもに対する効果的な対応の仕方に関する1つの情報を今後の研究に提供した。5) 検討された研究変数自体の研究領域に、新たな研究課題を残した。たとえば、自己概念、原因帰属、葛藤事態の対応様式のそれぞれにおける社会的期待の影響に関する問題、文章記憶におけるタイトルの効果に関する問題、目標設定行動の指導に関する達成動機づけ理論の妥当性の問題などは、それぞれの研究領域に価値ある課題として

提案することができる。

本研究は、既述の如く、従来からの教育心理学への批判を含み、また研究の推進に当たっても、教育の場面は見据えられている。しかし、本研究の成果を持って、直ちに現実の教育現場における教育的価値の実現活動へと演繹を行うとするためには、使用された諸概念の外延の狭さが問題となろう。就中、児童・生徒の過去における成功・失敗の諸経験との関連、および児童・生徒の問題解決領域の持ちうる「個有性」に関しては、未だ十分な吟味はなされていない。更に細かくは、幾つかの部分において、児童・生徒の意識とは本来独立に測定され、かつ関連が調べられるべき概念が、児童・生徒の意識を通して間接的にしか測定されていない。それ故に、確かめられるべき〈要因―帰結〉関係が、実は、児童・生徒の意識内一貫性の確認に留まっている危険性もまた指摘されるべきであろう。今後の研究の過程で、説明されることが期待される。

よって、教育学博士の学位を授与することを適当と認める。